

鴻 koh

月刊俳句誌

令和3年5月1日発行

(毎月1回1日発行)

第16巻第5号 通巻179号

5 月号

2021



菜の花に沖あり遠き道のあり

上げ潮の干潟に昼の黙がくる

海女の干す若布が浜の磯伝ひ

緋梅散る小さき石灯籠の辺に

雀隠れ座すに居心地よき日向

人麻呂の忌よパンジーの咲く丘に

ちりぢりとなり雲雀野の風となる

逍遙の道の傍への諸葛菜

遊びごころふと五分咲きの花の下

野火駈けよ怒りゐる龍さながらに

空海の寺領にひらく苗木市

花菜どき何も持たざる手を洗ふ

あをあをと麦ふかぶかと山の晴

# 昼の黙

主宰作品

増成栗人

荒川心星

## 春の雪

春の雪仏間に静寂戻りけり  
母在すあたりへ蘆の絮が飛ぶ  
古墳への道菜の花の道となる  
甘檜丘の笹鳴き澄むことよ  
陽炎うて飛鳥詣での宿場町  
歩き疲れて探梅のお茶処  
林泉の大きな日向卒業期  
木の芽草の芽妻とふたりで籠りゐる

少年野球春の土蹴り盜塁す

囀りの中に鴉のあああも

みささぎの前を素通り落椿

鳥声を詰め啓蟄の古墳山

春しぐれ枸橘の刺おそろしく

斯許りの起伏によろけ梅真白

葦芽ぐむ運河巡りの波被り

蒔草炒めて風に疲れし日

## 春の土

半谷洋子



神野未友紀

少年の爪弾くバンジョー風青し  
 フクシアの揺るる風より詩の生まる  
 貨車走る鉄路の脇のフロックス  
 ラベンダー畑妖精横断中  
 駒鳥や幹に小さな扉あり  
 伝説の巨人踏み出す夏の潮  
 きりぎしに古代の祭壇夕焼けす  
 木苺の蔓に覆はれ聖廃墟

夏の果ケルト十字を見上げたる  
 驟雨過ぐ辻に歌声戻りけり  
 夏かもめティンホイッスルを聴く波止場  
 夕虹や羊の群れの帰りゆく  
 潮風に馬と吹かるる晩夏かな  
 アイリッシュハーブ青野の音色して



アイルランドの木には時々妖精のための扉が見られる。楽器の音もその地の風や光、人の騒めきと共鳴して聞こえた。岸壁は立つと潮流に乗って旅した古代人が見えてくるような。あの風に吹かれに、もう一度行ってみたいな。

「藤」は山野に自生するマメ科の蔓性落葉木で、晩春に咲く花は優雅にして清らか。小さな蝶形花が房をなすのが特徴で、「野田藤」は、かつて大阪の野田に名木があったことからこう呼ばれるが、長い房となる。野生の藤は「山藤」と呼ばれ短いのが特徴。ともに棚に仕立てて垂れる花房を楽しむ。

蔓は丈夫で物を縛ったり、籠材に利用され、種子は食用にされることもある。

白湯飲んですぐそこにある藤の寺 栗人

# 藤

## 特集

### 俳句に詠まれた藤

楨尾麻衣

山野に広く自生して蔓が左巻の山藤と右巻の野田藤と大別されている。

山藤は他の樹木や岩などに巻きついて高く這いのぼり四月〜五月頃房をなして紫色の蝶形の花が同時に咲き揃う。

野田藤は花の優美なことから鉢植や藤棚を作り古くから栽培観賞されて来ました。風に揺れるさまを藤房、藤波と言われる。

今年「鴻」十五周年にあたり、「鴻」の仲間の句を多く取り上げてみた。

藤の雨墓に向かひてあたたかし	吉田鴻司
異国語のあつまつてくる藤の下	谷口摩耶
三万の藤房咲かせ逝かれけり	赤峰ひろし
下がり藤丈を揃へて吹かれをり	横井 遥
藤垂れて気怠るき午後となりけり	小澤 元
藤棚の句として	
刈草の匂ひが藤の棚の下	増成栗人
藤棚に真昼の重さありにけり	高橋葉子
藤棚へ祈祷太鼓の銜せり	伊東美鈴
山藤の句として	
山藤の高さの山の木の高さ	後藤兼志

山藤の咲いて烟となりけり 高木直哉  
 法螺の音に山藤の風重くなる 中村世都  
 竜昇ること山藤の昇りけり 西野桂子  
 山藤に瀬越の風の立ちにけり 守屋吉郎  
 山藤の淡き光も昼のいろ 水沢和世  
 咲き終ると細長い実を結び、冬になると果皮が開裂して種子が飛散する。野性の種子はポンポンと大きな音を立てるといふ。実は炒って食べたり、薬用とされる。

藤の実の句として  
 藤の実の愁ひのごとく垂れにけり 富安風生  
 吾子と姪同じにかはい藤は実には 星野立子  
 藤の実の谷へ飛ぶ音夜も絶えず 水野爽徑  
 各地に藤の名所が数多くある中、仙台にも伊達政宗ゆかりの古木がある。

政宗が朝鮮に出兵し帰還の際、鉢植として持ち帰り、代々藩に大工の棟梁として仕えた千田家がこれを拝領し、以来当地で大切に育てられた。四百年以上たつ今も見事に花房と香りに満ち溢れている。花の季節になると一般公開され、多くの人々が楽しむ事が出来る。三十年前友人達と堪能した帰り、病状悪化の母の病床に駆け付けた少し悲しい思い出がある。今はすぐ近くの墓に眠る母の命日には、変らぬ見事な藤の花に癒やされている。

藤咲いて海面あるいてゆけやうな

辻 桃子  
森多 歩

この海は間違はなく大阪湾であろう。  
夕日の沈む頃の茅渚の海は、波が静まりしるがねの絨緞を敷きつめた夢の架け橋となるのです。

まさしく「あるいてゆけやうな」です。  
藤が咲いているのは須磨のあたりでしょうか。青空に溶けそうな淡紫の山藤は見上げるばかりの太木です。

遙か向こうにまぶしく輝くくにうみの島が見えます。  
未知の世界への期待で心はずむさま、その心情が表れていま

す。  
淡路島にある県立淡路島公園には、アニメパーク「ニンゲンノモリ」がオープンされており、子供達の人気を得ています。

藤 特集

# 藤の一句

「藤」を詠んだ自分の俳句、または「藤」が詠まれた愛語の句と、その句についてのエピソードや、俳句のなかでの「藤」について語っていただきました。

それらのキャラクター達が快く迎えてくれるでしょう。  
そんなことまで想像出来る夢のある一句です。

白藤や揺りやみしかばうすみどり

芝 不器男  
原 達郎

芸術の世界には天折の天才と呼ばれる作家たちがいる。我が国近代に例をとれば、関根正一（没年二十歳）、滝廉太郎（同二十四歳）、立原道造（同二十四歳）、石川啄木（同二十六歳）などか思い浮かぶ。そして俳人としてはこの芝不器男（同二十六歳）である。彼ら二十代半ばで逝った人々にとって、その人生すべてが青春であった。

掲句の眼目は何といっても「うすみどり」であろう。藤棚の藤が揺れやんだとき、日差しを受けた白藤の群れに「うすみどり」色を感じたというのである。この「うすみどり」は、青みがかった、水浅葱よりもさらに薄い緑であろう。クールな空気感と青春性を感じる（昭和三年不器男二十五歳）。この句から連想される句に、大正十四年虚子五十一歳の作品「白牡丹といふといへども紅ほのか」がある。一輪の豪華な白牡丹の花弁のなかにほのかな紅を発見したというのである。虚子が知性の句であるならば、不器男は感性の句、といふのは単純に過ぎようが、その観察には壮年と青年の違いを感じる。

山本健吉は別の句の評釈で、不器男を「鋭敏な言葉の魔術師」と呼んでいるが、この句においてもそれがあてはまると思う。

藤袴手折りたる香を身のほとり

加藤三七子  
美濃律子

藤袴は中国原産で奈良時代に渡来した植物。『万葉集』に秋の七草の一つとして詠まれている。優しい芳香やうすむらさき色の花が好まれ、今でいうポプリや香水のような使い方をされたようだ。

一九九八年、句集『麗銀集』で第三十八回俳人協会賞受賞の作者の句は奥床しい王朝文学を彷彿とさせる。

『源氏物語』第三十帖「藤袴」の巻では、若い貴公子が年上の女君に告白する場面で藤袴の一枝を手渡そうと試みたりしている。残念ながら失敗に終わるのだけれど、これを踏まえた訳ではないだろうが、藤袴の花言葉は「ためらい」「遅れ」「あの日を忘れない」というのがあるらしい。

私は藤袴の香りを知らないが、クマリンという成分が桜餅の葉と同じで、甘い香りを放つのなら身のほとりに纏ってみたいと思う。

藤揺れて朝な夕な切通し

中村汀女  
水沢和世

やや長身の汀女は、藤色の和服で、髪にも一条の紫を入れ、舞台上立つと、一同の瞳を釘付けにさせた。「風花」の新年会での事である。参加者は千人に上る会場、並ぶ来賓の方々の中、一際華やかな汀女であった。世間では、「あ的美貌と、ご主人の存在がなければ、今の名声はなかっただろう」などと言われていたようだ。「カリスマ性」これは娘さんの小川濤美子

氏と言えど、受け継ぐ事は出来なかった。私も心酔していた。

掲句は、高濱虚子の元へ、指導を受ける為に、鎌倉の切通しを往き来た時の句と、推察される。藤が揺れるとは、常套的かもしれないが、行きも帰りも、藤の揺れる様を見ながら心は、句に對しての情熱で漲っていたに違いない。多忙の中、汀女を揺ぎ立てる向上心は、如何許りが、平凡な私には、想像がつかない。

赤べこの顎突き出して藤の雨

上遠野 藍  
岩佐 梢

句集『万華鏡』に納められた初期の作。藤は日本の原産種で、古くから庭木として植えられてきた。  
音もなく降る雨に、藤のむらさきの枝垂れ花が、春の終りを告げるように揺れている。

藍さんの出身地は、福島県石川町で会津に近く、赤べこは会津の郷土玩具。「赤べこの顎突き出して」の表現に、早くに父上を亡くされ、女手で育ててくれた母上への健勝を、ユーモラスな首振り牛に重ねている。静かな雨の一日だったにちがいない。

自宅にコーラス仲間を集め、句会を続けて来られたことが、「鴻」矢切句会に繋がったのである。

母ミルク母には告げず癌手術  
気がつけば乳房が一つ田里祭

らつきようをかりかり噛んで生きてをり

三・一一東日本大震災の前年、七十二歳で逝去された。

# 言葉閑話



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>



# 羽音集

増成栗人 選



家路への道の傍への雪柳  
野仏の温顔よ水温みけり  
白子干し沖よりの日が束になる  
ミシン踏む三河の春を玻璃越しに  
税務申告するにも寒き列に蹴く  
蘆の芽にそこはかとなく潮の寄る  
風生れよ湖畔の土手のつくづくし  
雪柳かそけき風の切通し  
初音聴く水辺の刻のゆるやかに  
潮干潟大きな鳥の旋回す  
かたかたと立春の絵馬鳴りにけり  
日の当たる方へと二羽の雀の子  
ご奉仕の春の落葉の庭を掃く  
紅梅と白梅が咲き揃ひけり  
味噌仕込む樽の重さよ春浅し  
あたたかや両手に振つて貯金箱  
春めくや黙つてをれぬ貝の舌  
うららかや手書きの地図を疑はず  
あのと云ひ通じる話草の餅  
残り鴨吾の視線に向き変ふる

豊川 中田晴美

船橋 藤原明美

大阪 遠藤 泉

松戸 吉清和代